

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 伊藤 岳

主題

国内における武力紛争のマクロの帰結は、戦闘のミクロの時空間展開からどのような影響を受けるのか。本研究は、以下の二つの問いを設定してこの問題への解答を試みる。すなわち、第一に、内戦における戦闘の展開（暴力行使の頻度と形態）の空間的多様性はなぜ生じるのか、そして第二に、その内戦における戦闘の展開は内戦の継続期間とその帰結・終結形態になぜ、どのような影響を与えるのか、の二つである。

論文の構成

本論文は、問いを設定し、論旨を概観する第一章、分析の方法論を説明する第二章、武装勢力による攻撃の空間分布の決定要因のシミュレーション分析を行う第三章、無差別暴力と選択的暴力とに戦闘を類型化したうえで前章同様の分析を行う第四章、内戦の継続期間に対して戦闘の空間的拡散のパターンが与える影響の計量分析を行う第五章、前章とは角度をかえて、内戦の帰結に対して戦闘の空間的拡散のパターンが与える影響の計量分析を行う第六章、そして結論を述べ、今後の研究の可能性を示唆する第七章から構成される。

まず第一章は、本論文の二つの課題を設定する。すなわち、内戦における戦闘の展開（武力攻撃の頻度と形態）に空間的多様性をもたらす要因の特定、そして第二に、内戦における戦闘の時空間的展開が内戦の継続期間とその帰結・終結形態に与える影響の解明、の二つである。

次に第二章は、本論文が依拠するデータ（2004年から2009年にかけてのアフガニスタンにおける国際治安支援部隊（ISAF）および武装勢力による武力攻撃について、その関係主体、戦闘関連犠牲者数、攻撃の発地点・発生時点等を整理したSIGCATs イベント・データ、スウェーデンのウプサラ大学におけるウプサラ紛争データ・プロジェクト（UCDP）による「組織化された暴力」に関する地理的イベント・データ（GED）など）、空間上に位置する主体間の動的な相互作用が生み出す帰結を分析するためのコンピュータ・シミュレーションの分析手法（agent-based modeling、以下ABMと略記）、空間計量分析の分析手法、そして分析の射程（とりわけ本論文が採用する内戦の定義）を説明する。

第三章は、アフガニスタン戦争において武装勢力の戦闘行動を決定した要因の実証的シミュレーションを行う。民族地勢・居住分布などの外生的要因と、戦闘行動の拡散などの内生的要因に着目し、外生的な要因に加え内生的な要因が戦闘の空間分布を規定することを明らかにする。

第四章は、攻撃の対象を敵対勢力の支持者に限定しない「無差別暴力」と、それに限定する「選択的暴力」とに戦闘を二分したうえで、戦闘類型ごとに前章同様の実証的シミュレーションを行う。前者については外生的要因の影響が大きい一方で、後者については外生的要因に加えて内生的要因の影響も受けることを示す。

第五章および第六章は、「取引としての戦争モデル (bargaining model of war)」の観点から、関係諸主体間の「交渉による解決」の挫折として武力紛争を捉える視座を採用して、戦闘の展開と武力紛争の終結とを関連づける。第五章は、アフリカ諸国をはじめとした世界各地における内戦において、戦闘の空間的拡散のパターンを「隣接地域への拡散」と「遠隔地域への拡散」とに二分したうえで、拡散類型ごとに、それが内戦の継続期間に与える影響の計量分析を行う。前者については内戦の継続期間には有意な影響を与えない一方で、後者については有意な負の影響を与えることを明らかにする。

第六章は、内戦の帰結・終結形態を「政府軍に好ましい内戦終結」と「武装勢力に好ましい内戦終結」とに二類型化したうえで、第五章と同様の分析を行い、隣接地域への拡散はいずれの内戦終結形態の蓋然性にも影響を与えない一方で、遠隔地域への拡散はいずれの内戦終結の蓋然性にも負の影響を与えることを示す。

そして第七章は、本論文が提供する主な知見とその含意を整理したうえで、今後の研究の可能性を展望する。殊に、国外勢力による内戦への介入がその終結の見通しに与える影響の分析の有望性を論じる。

評価

本論文は、主として以下の二点において極めて優れたものである。

まず第一に、本論文は内戦をめぐる広範な先行研究の達成を誠実に受けとめたうえで、それらの改善をさまざまな角度から試みている。たとえば、内戦、戦闘、戦闘の拡散、内戦の帰結のそれぞれについての類型論には、先行研究と真摯に向き合う筆者の姿勢が感じられる。また、利用可能なデータ・セットの一長一短についての検討、シミュレーションを通じて得られた一般的命題が特定のパラメータの条件に依存するものではないことの確認、空間計量分析の結果が特定の「空間単位」の仮定に依存するものではないことの確認なども入念に行われており、関心を共有する研究者の精査に耐えるものである。

そして第二に、本論文は国内における武力紛争のミクロの展開とマクロの帰結との因果的な架橋に果敢に挑んだ意欲作であると同時に、コンピュータ・シミュレーション、空間的計量分析のそれぞれにおいて粘り強い分析を展開する労作として仕上がっており、その完成度は高い。

無論、本論文にも彫琢の余地が見当たらない訳ではない。それは、ABMの分析手法と、「取引としての戦争モデル」との相性に由来するものである。ABMの分析手法は、空間的に配置されたエージェントの属性を仮定したうえで、その動的な相互作用が生み出す帰結の分析を行うものであるのに対して、本論文が、国内における武力紛争のミクロの展開

とマクロの帰結とを因果的に架橋するために導入した「取引としての戦争モデル」は、本来、取引の当事者がそれぞれの意図の認識などを互いに操作し合う戦略的駆け引きを分析の射程にとらえるものである。前者と併用されれば、後者の分析は淡泊にならざるを得ない。後者の観点からすれば、戦闘類型（殊に無差別暴力）が、紛争終結後の移行期における正義の追及に与える影響や、国外勢力の介入の動機に与える影響などについても一定の考察を望みたいところではある。

しかしながら、このように彫琢の余地がいくぶんか残るとしても、本論文によって示された著者の力量をもってすれば、今後、これらの課題も克服して研究の新境地を切り開くことは十分に可能であると考ええる。

結論

したがって、本審査委員会は一致して、論文提出者に博士（学術）の学位を授与するのが適当である、との結論に達した。